



県庁で開かれた「米づくり」名人座談会

神の与えたイネだと思ふ。

ミヨシ、オオトリは多収性だが冷害に弱いので三分の一程度にしたい。

工藤 武尚さん（二ツ井町・篤農家・四十歳）

昨年は、はじめはよかったが、七、八月の天候、とくに八月中旬以降の高温で一時は豊作と思われたが、八月末の長雨と九月中旬のねん実期の大候不順で、晩生のものは被害をまぬかれたが一般に被害が多かった。

米づくりは農民と指導的立場にある人びとが、体になって推し進めてほしい

また、適地適作、とはいっているが、まだ結論を出していないので、早い時期にデータを出してほしい。

加藤 金吉さん（琴浜村・三十四年日本一・六十五歳）

稲作は天候に支配され計画どおりにいかないものだが、昨年の不調は天候不順はもとよりだが、私はその原因をこう見ている。

①農業外収入に走るので、作物を育てることに對して意欲がな

い。②堆肥を入れなくなった。したがって稲の育ちよい環境でなくなっている。アゼを刈っても草を置きっぱなしの姿が多い。チッソ性肥料を入れ過ぎたり、たいせつなワラを焼いている風景も見られる。

稲だって住みよいところに育ちたいのは人間と同じだと思う。もっと肥料の組み合わせを研究して軟弱徒長を防ぎ、スガタのいい稲をつくるように努力してほしい。

正木 喜一郎さん（由利町・三十年県

二位・七十歳）

昨年は減収になると思われたハツニシキで十町あたり六百キとなった。子吉川流域は台風、水害、病虫害も少なかったのではない。ニシキ系は早生種のため八月上旬の出穂期の降雨など天候に左右されやすいところから評判はよくない。

イモチは人間が付けるものであることを反省したい。イネは姿で、美人のような稲をつくりたい。作が悪いと天候のせいにするものがあるが、これは自分たちの努力の足りないことを忘れたことばだ。

稲づくりは人づくりから

長沢 誠以さん（仙北村・四十年天皇杯・三十八歳）

米づくりを二十三年やってきたが、十町あたり十人十俵を目標としてきた。米づくりもプロだという精神に徹したい。昨年は十二人で八・八俵の成績であった。

農業は多く収量をあげることもたいせつだが、あくまでも企業・経営であるという立場で生産費を下げることも考えた

い。稲づくりは田植と刈り取りが労働力のピークとなるので、これを崩すためにテレータイプの機械を導入して七、八十人分の労働力を家族だけで消化している。また田植も自家労働力だけと心がけて特殊な育苗技術（直きまきと苗植の中間のもの）で、土のついたまま植えるので活着がよく、労力も従来の四分の一ですんだ。収量も慣行を百とみて九八割は収穫

できた。また新しく刈り入れに収束機を使ったところ調子がよい。機械化も系統的に使えばロスが少ない。

畦はんをブロックにしたところ、草刈あぜ塗りの労力が省けたほか漏水、ネズミの害を防いだほか水温上昇にも期待できる。

田口 機一さん（田沢湖町・篤農家・六十歳）

稲は太陽のエネルギーと土の養分をとって成長するので、天候に支配されやすい。昨年の生保内地区は六月末から八月上旬までの異常低温で肥料の分解が悪く根の成育もおくれた。九月末の倒伏、十月上旬の強霜で追いこみがたりなかった。稲は分析すれば肥料の成分、吸収率を逆算して高率的な栽培ができる。それにしても、もっと気象の変化に注意して稲づくりを考えたい。私は過去八十年の気象を調べているが、生保内は年間を通じて県平均より二度低い。

それだけに、いつの年でも早まき、早植え、早除草の体制が必要であり、肥料は実際に栄養となつて、吸収される量を考へて与える必要がある。

土田 元太郎さん（大雄村・四十一年七百五十キ一位代表・三十二歳）

昨年は十町当り七百五十キ（五石どり）は達成できなかった。大きな面積で収量をあげるには、

- ①苗をよくそろえる。
- ②元こえを均一にする。
- ③田植を均一にする。

——ことなどがたいせつであり、これを実施することによって十町当り七百五十